

作業毎に日誌の記帳を！！

月旬	5月			6月			7月			8月			9月			10月											
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下									
生育ステージ	育苗準備			育苗期間			活着期	有効分け時期		無効分け時期	種の発育期間			登熟期													
	※もみ枯細菌病対策(育苗期) ① 種子消毒の実施 ② 播種量・催芽粒130g(1.1合) ③ 風通しの良い場所に並べる ④ 被覆資材を長期間かけない ⑤ 水をかけすぎない																										
水管理							浅水灌水			中干し	浅水灌水			間断灌水		落水											
主な管理作業	土づくり			播種			基肥施用			田植			除草剤散布			種肥施用			本田防除			収穫			秋耕		
玄米の充実を良くするため 落水は収穫の1週間前																											

育苗基準

※健苗育成と、病害の発生を防ぐ為、23日苗を目安とする。

- 種子**
 - ・ 全量毎年種子更新を行う。(栽培履歴証明、品種特性維持、病害虫予防)
- 用土**
 - ・ 10a当たりあさくら培土4袋を準備する。
- 種子消毒**
 - ・ テクリードCフロアブル200倍液とスミチオン乳剤1000倍液に24時間浸漬。
(水10ℓにテクリードCフロアブル50cc+スミチオン乳剤10cc)
- 浸種**
 - ・ 芽立ちを揃えるため、浸種日数は充分にとる。
 - ・ 1日1回水替えし、1mm程度芽出しを行う。
 - ・ 水替え時に上下の種袋を入れ替える。(芽出しを揃えるため)
 - ・ 種子は播種前日の夕方にあげる。
- 播種**
 - ・ 播種量は催芽粒で1箱当たり130g(1.1合)を基準とする。
- 平床育苗**
 - ・ 覆土は十分行い、苗箱は日当たりが良く風通しの良い場所に並べ、被覆資材で被覆する。
 - ・ 土が乾いたら灌水する。
 - ・ 苗の長さが4~5cmになったら被覆資材を除去する。

7. 箱施薬

農薬名	使用時期	使用量	対象病害虫
防人箱粒剤	は種時(覆土前) ~田植当日	1箱当り 50g	いもち病
ブーンゼクテラ箱粒剤			ウンカ類 コブメイガ

※確実に1箱当たり50g施用しないと防除効果が劣る。

土づくり

分類	資材名	施用量 10a当たり	備考
有機質	万能堆肥	2t	・腐植の増加 ・土壌通気性の向上、保水性の向上
	麦わら	全量	・耕起前に硫安10kg/10a施用 ・腐植かん水の助成
土改剤	ミネラルG	200kg	・微量元素の供給
	ケイカル		・石灰の供給
	珪鉄		・けい酸の供給

施肥基準

慣行	肥料名	基肥	種肥	N	P	K
		大地のめぐみ(ケイフン)	120		10.4	
	ちくごのめぐみ444	15		(無機 N3.8)	9.1	8.5
	スーパーユーキくん3号		35			
省力	大地のめぐみ(ケイフン)	60		10.1		
	有機エムコート355(100日)	55		(無機 N3.5)	5.7	4.5

- ※省力の施肥体系では減収することがある。
- ※有機物・リン酸・カリ補給のため、発酵ケイフンを必ず施用する。
- ※野菜跡は、生育に応じて基肥の量を加減する。

除草剤使用基準

除草剤名	使用時期(田植後)	ヒエの葉齢	
オйкаゼZ	1キロ粒剤 フロアブル/ジャンボ	0~12日 5~12日	3.0葉期
キマリテ	1キロ粒剤/フロアブル/ジャンボ	0~12日	3.0葉期

※除草剤散布後は、1週間程度落水口を閉め、灌水状態を保つ。

病害虫防除基準

○基本防除(1回のみ)

時期	体系	農薬名	使用量 (10a当たり)	対象病害虫
8月下旬 (出穂直前)	粉剤	ダブルカットバリダトレボン粉剤3DL	4kg	いもち病、紋枯病、ウンカ類、カメムシ類
	液剤	ノンプラスバリダフロアブル	1000倍	いもち病、紋枯病
スタークル液剤10		1000倍		

耕種防除基準

いもち病対策

1. 窒素過多とならないよう施肥基準を守る。
2. 土改剤は病害に対する抵抗力を強めるので、左表のいずれかを施用する。
3. 補植苗は不要になったら早急に処分する。

紋枯病対策

1. 窒素過多とならないよう施肥基準を守る。
2. 栽植密度は坪60株とし、植付け本数を3~4本とする。
※1株当たりの本数が多いと、紋枯病を助長し、倒伏しやすい。

カメムシ対策

- (稲が出穂すると、水田へ侵入し穂を吸汁するので、斑点米の原因となる。)
1. 水田周辺の雑草管理を徹底し、カメムシの生息密度を下げる。
 2. 畦草刈りは出穂2週間前までに終わらせ、出穂期以降は行わない。

環境負荷低減の取り組み

- (温室効果ガスであるメタンガスの排出量低減に向けた取り組み)
1. 中干し…メタン生成菌の活動を抑える。
 2. 秋耕…入水前に藁の分解を十分に進ませ、メタン生成量を抑える。
※メタンガスは酸素がない状態で有機物の分解が進むと発生する

○病害虫対策の基本方針

**特栽培ヒノヒカリは病害虫の本田防除が
出穂直前の1回のみです！！**

**耕種防除の徹底、土改剤施用で
硬い稲を作り、病害虫を防ぎましょう。**

※肥料・農薬は令和7年1月9日時点の登録に基づき記載しています。